



「英語コミュニケーション」再開

1 年余りの休止期間を経て、10月19日より「英語コミュニケーション」が復活しました。この企画は本学図書館との協力の下、留学生チューター(TA)を10名程度の少人数で囲み、英会話スキルを磨くもので、本学の学生であれば誰でも参加できます。今学期は週1回(毎週木曜日)、本学北図書館の西棟3階グローバルフロア、もしくは西棟2階セミナールームで開催しています。LSOでは2013年夏よりこの英会話教室を開催してきました。

今学期の「英語コミュニケーション」では、「どうすれば平和裏に国家間の対立を解決できるか」という具体的な考えさせられるテーマが毎回設定されています(参加者がテーマを提案することも可能です)。過去の実施時のような、参加者の興味や話の流れに応じて話題を設定し会話を進めるといったスタイルとは一味違います。参加者は他人の考えに耳を傾けつつ、自分の



知識を総動員して自分の意見を英語で主張しなければなりません。言いたいことが英語にできず、悔しい表情を浮かべる参加者も見られます。それでも、毎回時間いっぱいまで会話が続きます。

講師を務める情報科学研究科博士課程2年のアリレザ・ピレサンさんは、ロボット工学を専攻するイランからの留学生です。

講師を務める情報科学研究科博士課程2年のアリレザ・ピレサンさんは、ロボット工学を専攻するイランからの留学生です。



スポーツマンを思わせる風貌でありながら、丁寧で穏やかな人柄を感じさせます。11月2日開催回の「私たちの仕事はコンピュータに奪われるの?」や12月7日開催回の「なぜ中東で武力衝突がなくなるか」といったテーマは、アリレザさんならではの問題提起です。また、実施にあたり学習サポート英語担当チューターである文学研究科修士課程2年の林俊一朗さんが全体の取りまとめやテーマ設定、そしてLSOのHPで公開している活動報告(<http://asc.high.hokudai.ac.jp/ec/report/>)の作成に尽力して下さっています。

今学期は全9回の実施で延べ64人の参加がありました。リピーターもいれば初参加の学生も毎回おり、1年生から博士課程の大学院生まで様々な参加者が触れ合う場となっています。

LSOでは学生のニーズ把握に努めつつ、来年度以降も引き続き「英語コミュニケーション」を実施していく予定です。(浅賀圭祐)

スタッフの心象 第16回「リピーターの学生さん」

このコーナーではLSOに寄せられる進路・修学・学習相談の内容を元に、相談現場の様子をお伝えします。

LSOに着任して早2か月が過ぎました。自分自身、まだまだ未熟で、同僚の手助けを受けながら、何とか少しでも学生さんに、ひいては北大に貢献したいと思う今日この頃です。

そんな私が着任して嬉しく感じているのが、自分のところに化学や自然科学実験について何度も質問しに来てくれる「リピーター」の学生さん方がいらっしゃる事です。もちろん、こうした学生さんは日常的に化学以外の色々な科目についても積極的に質問しています。とは言え、着任して間もない身としましては、学生さんが自分のところに足を運んで質問してくれるということ自体に、大きな喜びを感じてしまうのです。

しかしながら、それと同時に、教える側としてはこうしたリピーターの学生さんがいてくれることに甘えてしまう危険性もあると思っています。学生さんがまた来てくれるから自分の教え方のスタイルで大丈夫と過信するようではいけません。まだ学習サポ

ートを利用したことのない学生さんが数多くいるということを念頭に置きながら、少しでも自分の教え方・話し方に工夫を加えていきたいと、常日頃心掛けております。例えば、学生さんに少しでも楽な気持ちで臨んでもらえるよう、自分が説明する時には「分からない所は何度でも質問して下さい」と付け加えたり、学生さん自身が考えている時には「ゆっくりでいいですよ」という言葉をかけたりするようにしています。

教える側の人間にとって、こうした心構えは当然のことなのですが、それを再確認させてくれるのがリピーターの学生さんの存在です。その数をもっと増やしていけるように、これから研鑽を積んでいきたいと思ひます。(城谷大)



「何でもできる? 1年間」

高等教育推進機構副機構長 全学教育部長・総合教育部長
白木沢旭児



私の大学1年生というのは、1978（昭和53）年、京都大学の文学部でした。文学部を選んだのは、漠然とではありますが、哲学や歴史への憧れがあったからだと思います。高校時代には倫理社会、世界史、日本史は好きな科目でした。そのため、4月早々に「歴史研究会」（略称「歴研」）というサークルに入りました。当時、各大学に歴研があり、京都の連合体（学歴研）もありました。活動は、週に1度ずつ総会および部会があり、部会は古代史部会、中世史部会、近代史部会、現代史部会などがありました。

私は、何となく興味があったということ、先輩の誘いに応じて現代史部会に所属しましたが、結果として、これが現在の仕事になってしまいました。とりわけ、全学教育の「歴史の視座」や一般教育演習では、日本の戦後史を扱うことがあります。大学1年生のときに農地改革とか財閥解体とかをテーマに本を探したり、レジュメを書いたりしたことを思い出します。当時買った本を、授業準備の際の参考文献として使うこともあります。もっとも、大学1年生のときに取り組んだことが、その後の職業に直接結びついている、というのは実に稀有な事例かと思えます。

大学で学んだことが役立ってよかった、というよりも自分はこの40年間何も進歩していないのではないかと、という危惧の念の方を強く感じます。

さて、1年生の頃に話を戻しますと、実は、まだ哲学へのあこがれは捨てきれず、履修した授業は、倫理学、宗教学、インド哲学、美学…と哲学系の科目が多かったと記憶しています。たまたまクラス（文学部3組、通称「L3」）に哲学志望が多かったこともあって、哲学の自主ゼミをつくりました。読んだのは『プロレゴメナ』『現象学』『唯物論と経験批判論』（略称、「唯経論」）などです。そして1年間続けてわかったことは、自分には哲学は向いていないということでした。ちょうど2年次の秋頃に文学部の専攻を決めなければなりませんでした。そのときには迷わずに「国史学」（日本史学）を選び進級しました。

しかし、1年生の頃にもっとも忙しかったことは、授業でもサークルでもなく、「自治会」活動でした。ただ、これは、説明するのが大変なので、簡潔に記しますと、存続が危ぶまれた「自治会」があって、これを支える（つぶさない）ために忙しく働いた、ということでした。

また、当時、「餃子の王将」が餃子無料券（各支店1枚ずつの束）を大学門前で配布しており、それを使うために京都市内の王将支店を自転車次々と制覇したこともなつかしい思い出です。おかげで、京都の地理には詳しくなりました。

現在の北大は1年間、総合教育部に所属し、学部学科について1年間じっくり考えて決めることができます。しかし、学部学生のアンケート結果を拝見しますと、「総合教育部の1年間は無駄だった」という趣旨の意見を目にします。自分の場合は、どうだったのか、と考えてみました。当時、国立大学の教養課程は2年間というのが普通でした。歴研・現代史部会に入ったことで、結果としては生涯の職業に出会ったこととなります。他方、履修した授業および自主ゼミは哲学系ばかりで、自分には向いていない、ということがわかったことが最大の収穫でした。その後の人生で何が残り、何が消えていくかは、そのときにはわからないのではないのでしょうか。そういう意味では無駄なことも含めて何でもできるのが、大学1年生ではないかと思えます。

メンバー紹介

無機化学を専門分野とし、函館高専などでの教育経験を持つ城谷大さんが着任しました。趣味は野球（オリックスファン）や相撲の観戦とのことです。よろしくお願ひ致します。

LSOメンバー			スタッフ(特定専門職員)		
室長			浅賀 圭祐	北大理学院修了	素粒子物理学
細川 敏幸	高等教育推進機構 教授	高等教育	立花 優	北大文学研究科修了	比較政治学
アカデミック・アドバイザー			吉安 徹	東大数理科学研究科修了	幾何学
大塚 吉則	教育学研究院 教授	温泉気候医学	城谷 大*	阪大理学院研究科修了	無機化学
八若 保孝	歯学研究科 教授	小児・障害者歯科学	事務補助員	石手洗 千春	
喜多村 晃	理学研究院 教授	光化学			

*2017年10月より着任

編集後記

化学を専門とするスタッフが着任したことで、理系スタッフ3人の専門分野が数学・物理学・化学と、学習支援を行う上で理想的な布陣となりました。各分野の専門家が力を並べ、日々議論することで、学術に関する視野が自ずと広がります。元々は北大出身者が占めていたLSOですが、最近は多様化しつつあります。良いお年をお迎えください。（浅賀圭祐）



ラーニングサポート室

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目 電話:011-706-7526 E-mail:lso@high.hokudai.ac.jp
北海道大学高等教育推進機構2階 URL:http://asc.high.hokudai.ac.jp/

次号は3月発行予定です